

国立新美術館で、ビュールレ・コレクション財団による「至上の印象派展」と題された展示が始まりました。印象派が好きなので、前売り券を購入して、待っていました。スイスの実業家である E・G・ビュールレが 1937 年から 1956 年にかけて収集した 64 作品が展示されています。フランスの 200 年の絵画の伝統から、「印象派」が、生まれ、開花し、変遷していく流れを、歴史的な系譜に従って展示するコレクションでした。傑作を身近で、手軽に眺められて、幸せだと思わずにられません。



可愛いイレーヌ ルノアール

その目玉は「絵画史上、最強の美少女」と銘打ったルノアールの作品です。西欧の美女の条件を満たすすべてが、エレガントに、優美に、清純に輝いています。モデルだった女性はこの絵が気に入らなかったそうです。悲しい思い出があったのでしょうか。もう一つはセザンヌの少年です。全体的に青みがかった空気の中に、白シャツと赤チョッキの少年の静かで初々しい姿が印象的に描かれています。トリ



赤いチョッキの少年 セザンヌ

コロールの清冽さが輝いています。私はセザンヌが好きです。そのほかに日本初公開の作品が多数展示されています。印象派の美しさは風景画の中に発揮されているように感じます。



陽を浴びるウォータールー橋、ロンドン モネ



ルーヴシエンヌの雪道 ピサロ



ベルヴュの庭の隅 マネ

眺めているとその風景に吸い込まれ、その大気に浸り、光を浴びているような、そして限らない幸福感に包まれてくる気持ちになります。画家たちは写実するなかで、目に見える形だけで



贈り物 ゴーギャン

はなく、心に訴える真実が見えてくる、それをどのように表すかを真剣に求めていることが分かります。ゴッホはジャポニズムに影響され、試みています。けれども、彼はそれ以上に内面的なモチーフを取り上げずにはいられなかった画家だと感じました。西洋の美を捨てたゴーギャンのタヒチでの絵は、人間存在そのものを、命そのものを美と受容する思いが伝わってきます。最後の部屋は撮影 OK でしたので、モネの《睡蓮の池、緑の反映》を私のカメラに収めました。

